

III. まとめ

近世城下町としての本町・唐人町

都城島津氏は時久の16世紀後期までは、島津本宗家一族の中で最大の城・領を有していたが、豊臣氏への敗戦後は、僅かに都答院（宮之城町）が与えられた。その間、都城は伊集院氏領となるが、荘内合戦を経て16世紀末には旧領が北郷忠能にほぼ安堵された。そして17世紀の初め、旧来の本城であった都之城（鶴丸城）を去って、軍神山（旭丘神社）を中心におよそ東西360m、南北270mの規模で領主の城館を建置した。17世紀の中葉すぎ、島津本宗家より北郷家を嗣いだ島津久定は、従来の城館を東方に移動するなど大造成を施した。

このように近世の城館の整備は忠能のⅠ期にその基礎が形成され、久定がⅡ期でそれを拡張整備させたといえよう。Ⅰ期の時より周囲の微高地には重臣層を配し、Ⅱ期に入っても城内は多くの門と馬場が展開し、城外にも複数の馬場・小路を割っている。そして城館の北部のいわゆる高岡街道に面して、南より本町、北へ唐人町がおかれた。また、その外縁や裏通りには職人もおかれたようである。唐人町の北端には「東西之園」、また「大堀調」えたとある。

なぜ既述のごとく城下町と規定したかといえば、都城島津氏は島津本宗家の中で最大の私領を有するからであり、出入はあるものの、大凡35,000石の大身であったこと。また、その館の形態よりみても、少なくとも初期の段階は、行政の中心の館の周辺をあたかも城の縄張りと同様に作事し、その惣構ともいべき外郭も大堀と土塁を敷設するなど、軍事的側面を持つていること。また、城下の人口に武士が多く、領域経済の中心であったことなど南九州型ともいるべき形態が指摘できるのである。その他、支配機構の面よりも町奉行の配下に武士の部当、町人の部当が存在するなどそのことを裏付けるものといえる。

本町：戦国期は鶴丸城の南側（当時は「中尾口」：大手）におかれ、都城で最古の町で、上記の新城下町造りの際に既述の場所に移った。別当以下みな苗字をもち、主君と行を共にしている譜代的町人グループであり、また御用商人も存在している。

唐人町：その成立は最終的には明末、清初の中國大陸の動乱を機とする。渡来後はやはり領主との関係は本町などと同様であったようであるが、多様な職能が歓迎されたものと思われる。この住人は唐通詞諸家の系譜を

図版23
天水家所蔵の
媽姐像ほか



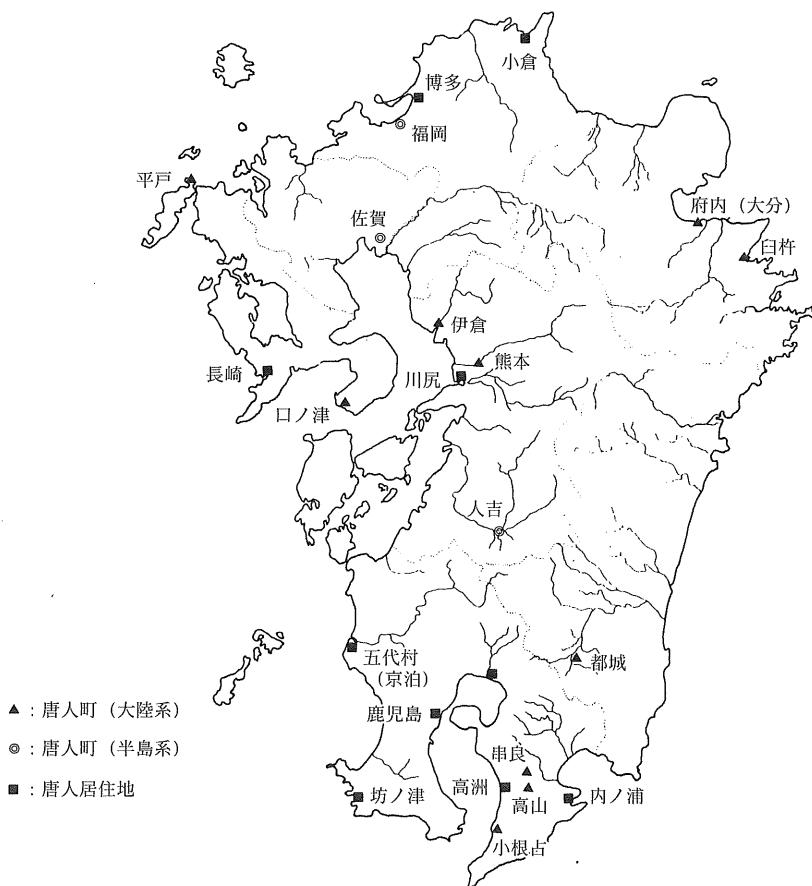
第9図 媽姐像ほかの写
(『荘内地理志』巻之十四より)

有し、また有名な幕府の儒官高玄岱の祖である医師高寿覚は都城の出身であり、特に地元では何欽吉の事蹟が名高い。このように唐人による医学など多才な文化面の影響は広く深いものがある。ところが、寛永12年（1635）の第3次鎖国令は上記の人々で長崎に移住した人もいるが、他は地域社会に同化していった。その背景には法的にも差別など存在しなかつたからである。

既述の両町は18世紀末のデータに依れば本町は男女513人、唐人町男女280人と見えていて、南九州では商工業人口は多いほうであろう。なお、この他に館の西方に三重町・後町など水運利用の町場も存在した。

ともあれ近世の商工業地域は、中世の水堀があり、空間には田圃が展開し、町寺詣りや神社の祭礼、また異国情緒豊かな媽祖の祀など当時はいん賑を極めたことであろう。ここ円通庵の觀音巡礼歌の「城の栄へを守る本町や 君が代仰ぐ觀音ぞこれ」は、この町の本質をいいえて妙である。かくして世はうつろい最大のスポンサーは去り、近代を迎えた。

過去の時空の原風景に想いをいたし、また自然との共存の中に真の生業があつた、見ぬ世の人々をしのぶ心が、喜々として市民の集う知的でロマンの漂うこの町づくりの原点といえよう。



第10図 九州の唐人町 (『週刊朝日百科日本の歴史』を改変)